

はじめに

千葉県柏市にある介護予防専門のデイサービス「よつば」には、よく見学者が来ます。ある日、見学者をお見送りしたときの場面です。

「きょうは、お越しくださって、ありがとうございました。また、いつでも、いらしてくださいね」

この言葉、だれのものかお分かりでしょうか。職員ではありません。実は、利用者の女性が自発的に玄関までご案内し、見送りの挨拶までしてくださったのです。

「まさか利用者の方に見送られるとは。玄関まで行く途中も、その女性が楽しそうによつばのことを説明してくれて、まるで我が家を自慢しているようでした」

後日、その見学者から聞いた感想です。とても驚いたそうです。このほか、よく聞くのは「職員と利用者の区別がつかない」という感想です。確かに、みな同じように話し、同じように笑い、同じように行動しています。ここでは、職員も利用者の方も、ともに笑い声のたえない充実した時間を過ごしています。

ところで、私が介護を経験したのは、まだ新聞社に勤めていた十六年前のこと。ちょう

ど三十歳のときです。三人目の子どもが生後四か月で、子育ての大変な時期、脳コウソクで半身マヒになった義父を、自宅マンションに招きました。まだ介護保険などなく、親の面倒は子が一身に引き受けるのが当たり前の時代です。そのころから、「介護」や「老い」について、深く考えるようになりました。

身も心も疲弊する在宅介護。家族の負担を少しでも軽くしてあげたい。それが介護保険制度の出発点です。その延長に、家事援助や、おもてなしする介護サービスがあります。しかし、高齢化が進む一方、介護現場の多くは、慢性的な人手不足や過酷な労働環境に解決の糸口を見出せず、明らかに行き詰まっています。

いま介護保険制度や介護サービスのあり方は大きな転換期にあると思います。とくに介護予防の分野では、たとえ介助が必要になっても、そこから自立に向かう、あるいは最低でも状態を維持できるような内容が求められています。

「行くところがある。することがある。友だち(仲間)がいる。」

この三つの条件を満たせば、最期まで充実した人生を送れるそうです。この考え方を参考に、とくに「人間関係づくり」を基本にした介護予防プログラムをつくりました。よつばは、その実践の場として平成二十年四月にオープンしました。プログラムの効果は、冒頭でご紹介したとおりです。どうぞ、よつばの様子をご覧ください。そして、この取り組みが、少しでも介護に関わる方、利用者の方のお役に立てますように。